

# 台湾の大都市部と地方の中規模都市における地域活性化の特徴 — 教育と国際交流の視点から —

高橋 和文  
Kazufumi TAKAHASHI

小室 達章  
Tatsuaki KOMURO

後藤 昌人  
Masato GOTO

中村 岳穂  
Takeho NAKAMURA

時岡 新  
Arata TOKIOKA

中田 平  
Hitoshi NAKATA

What Community Development Brings to Metropolitan and Local Urban Areas in Taiwan

## 1. はじめに

本研究は、2010年度におこなわれた金城学院大学人文・社会科学研究所の共同研究「台湾の社区营造における地域活性化の特質」に引き続き、台湾における住民参加による街づくりについて調査した研究である。また、本研究は、産学連携や地域住民の参加が、地域活性化にどのような影響を及ぼすのかを調査した2009年度の「納屋橋地域活性化プロジェクト」の延長線上の研究としても位置づけることができる。

今回の調査は、台湾の中でも発展している台北市や新北市の街づくりを調査することで、2010年度におこなった台南縣（現：台南市）<sup>1</sup>での調査との比較をおこなうためでもあり、また、その比較から、街づくりの手法が、大都市と地方都市とでの地域活性化に及ぼす役割の違いを明確に示すことを目的とする。

## 2. これまでの研究成果と問題意識

2009年度の「納屋橋地域活性化プロジェクト」は、金城学院大学と地元名古屋市の納屋橋地区にオープンした「ほとりすなごや 納屋橋（以下、「ほとりす」）」<sup>2</sup>という商業施設を運営するウッドフレンズ株式会社との産学連携プロジェクトのことである。プロジェクトの詳細は、小室ほか（2010）で報告されているが、金城学院大学の情報文化学科が

<sup>1</sup> 台南縣は、2010年12月25日に隣接していた台南市と合併して消滅したが、本研究では、2010年10月時点の調査と比較をすることから、当時の名称である台南縣を使用する。

<sup>2</sup> 「ほとりすなごや 納屋橋」は不振のため、「Sea Food Companyほとりす」と名称変更して営業をしていたが、2011年8月には完全休業してレストラン経営から撤退した。

もつ、デジタルコンテンツ制作、Web制作、CG制作、動画制作、マネジメントなどの教育資源を活用し、「ほとりす」を活用した地域活性化の取り組みである。このプロジェクトで得られた知見としては、「意図せざる協力関係の広がり」と、地域内の限られた資源を活用することで、地域の人々を地域活性化に巻き込むこむこととなり、それが地域活性化の進展につながる」ことを指摘した。

2010年度に実施した「台湾の社区营造における地域活性化の特質」では、台湾の南部に位置する台南縣における社区营造の取り組みを詳しく調査した。台南縣は、台湾の中でも中規模の都市として農業・林業・漁業を中心に発展し、近年は、南部科学工業園区や柳營科技工業区の開発を通して（ソーラーパネルの開発など）、商工業を中心とした産業構造に転換してきていた。2010年12月25日には、隣接していた台南市と合併し、現在はその一部となった。我々の研究グループは、2010年10月に台南縣の調査をおこなっており、当時は新営市に位置していた縣政府の庁舎において、縣知事であった蘇煥智氏から社区营造の成果を説明していただく機会を得た。また、台南縣政府の王大玉氏（台南縣政府新大同社会造営中心）の案内のもと、台南縣各地の「社区营造」に取り組んでいる地域を訪問し、住民主体による街づくりの様子を詳細に調査することができた。

社区营造とは、「社区」がコミュニティを、「营造」が建物や空間を建設することを意味しており、まさに住民主体の街づくりのことを意味している。この調査の詳細は、小室ほか（2011）の報告に記されているが、その特徴として次の四つが指摘されている。一つは、社区住民だけでなく、学生や子供たちの参加がみられるということ。二つめは、廃棄もしくは放置された資源を活用するという取り組みがみられること。三つめは、流行や時代の流れを上手に取り込んでいること。四つめは、日本統治時代に持ち込まれた各種資源が使われていることである。さらに、成功した社区の取り組みでは、日本との交流や日本人専門家のサポートも指摘されており（高橋ほか、2011）、社区营造は地域住民を主体とした街づくりではあるものの、社区住民や子どもたちの教育の場として活用され、日本をふくめた国際交流の場として、地域活性化の役割を担っているのである。本研究では、台南縣の調査から得られた含意として、地域活性化の教育に関わる側面と国際交流の場としての側面に着目し、台湾北部に位置する台北市と近隣の新北市の地域活性化を担う観光資源に関する調査をすすめることとする。

### 3. 対象と方法

今回の調査対象とした地域は、台湾の首都（直轄市）である台北市と、その近郊に位

---

<sup>3</sup> 台北市の概要については臺北旅遊網（台北市政府觀光傳播局）を、新北市の概要については、新北市觀光旅遊網（新北市）のホームページを参照。

置する新北市である。それぞれの都市の特徴については、以下の通りである<sup>3</sup>。

台北市は、台湾の政治経済の中核で、人口は約260万人である。市内は活気に溢れており、台北という言葉であらわすと「懐かしさ新しさが共存する街」である。近代的な高層建築と、そのすぐ目の前に屋台が並んでおり、どこかのんびりとした空気が流れている。

新北市は、台湾で最も人口の多い都市であり、80%以上の県民は、新北市の面積の6分1を占める10の県轄市に居住している。28.8%の住民は台北市もしくは高雄市から移入してきた外来人口で、外国人労働者が約5万人以上もいて、外国人の就労者人口は台湾の中でも上位に位置づいている。

つまり、今回の調査対象とした台北市と新北市は、台湾の中でも政治経済の中心であり、国際交流が最も盛んな地域であるといえる。教育と国際交流の側面から街づくりにおよぼす観光資源の特徴を明らかにする本研究の視点からも、台北市と新北市は、まさにうってつけの調査地域といえる。さらに、2010年度の調査では、台南縣という中規模の都市の中でも小さなコミュニティにおける街づくりが研究対象であったのに対し、今回の調査では、大都市部とその近郊における国際的な観光地としての街づくりを研究対象とすることで、両者の比較から、台湾が目指す街づくりの方向性を知る手がかりを得ることができると思う。

研究期間は、2011年10月20日～23日の4日間にわたって実施した。調査した地域と具体的な日程については、表1に示した。なお、各地域の調査には、台湾大学の王界人氏や地元会社員エミリー・スー氏に同行いただき、案内をしていただいた。

表1 調査をおこなった地域とその特徴

場 所	所在地	それぞれの特徴	日 程
台北車站(台北駅)周辺	台北市	台湾の交通の中心地として、各地とのアクセスを可能にする	10月20日～23日
101タワー	台北市	2008年時点で世界一高い高層ビル	10月21日
国立故宮博物院	台北市	文化遺産の展示・保存	10月22日
士林夜市	台北市	台北で最も大きな規模の夜市	10月22日
淡江大学	新北市	教育機関としての船舶博物館・歴史的建築物の保存	10月21日
淡水地区(小白宮・淡水紅毛城)	新北市	歴史的建築物の保存	10月21日
淡水漁人波止場	新北市	漁師の港を観光資源として活用	10月21日
金瓜石地区	新北市	かつての金鉱山を観光地として整備	10月22日
九份地区	新北市	歴史的街並みを生かした商店街	10月22日

以下、本研究で訪れた地域について、(1)台北車站とその周辺、(2)士林夜市、(3)淡江大学、(4)淡水地区（小白宮・淡水紅毛城）、(5)金瓜石地区・九份地区の街づくりの様子について概説し、それぞれの特徴について考察する。

#### 4. 観光資源および街づくりの特徴

##### (1) 台北車站（台北駅）とその周辺

台北車站（台北駅）は、3つの鉄道の駅が混在している建物で、台北と台湾各地を結ぶ交通の要としての機能を果たしている（写真1参照）。3つの鉄道とは、台湾鉄道、台湾高速鉄道（いわゆる新幹線）、MRT（いわゆる地下鉄）である。今回の調査では、台湾鉄道を利用して、金瓜石地区や九份地区への調査に出向き、MRTを利用して、淡江大学や淡水地区へ移動した。鉄道によって、切符に違いがあり、台湾鉄道では日本でもみられる紙製のものを使用し、MRTでは丸いプラスチック製で、チップ内蔵の切符を利用していた。

日本では、FeliCaを利用した共通乗車カード（SuicaやTOICAなど）が利用されるが、台湾のMRTではMifareを利用している。駅舎の1階は、大きな切符売り場があり、中央部には、子どもが遊べるような乗り物と展示物の準備が進められていた（写真2参照）。駅舎の2階には、食堂街があり、地元民や観光客が訪れていた。2階の食堂街は、台湾のお店の中では、閉店時間が比較的早く、夜の10時には閉店となっていた。

地下街には、多くの店舗があり、人々は、地下街を通りながら、駅周辺のデパートや地上へとアクセスしていた。駅や駅地下の様子は、日本の都市部とさほど変わらないものの、台北駅周辺には、夜でも数多くの高校生の姿がみられた。これは、台北駅周辺に、学習塾や予備校が多くあることと関連している<sup>4</sup>。台北駅周辺は、観光地というよりも、



写真1 台北車站（台北駅）の外観



写真2 台北駅1Fの様子

<sup>4</sup> 台北駅周辺の事情については、淡江大学の富田哲先生の話も参考にさせていただいた。

そのアクセスの良さから、地元民が台北近郊から集まる集客力を活用したオフィスビルや店舗、学習塾が目立ち、また、観光客が台湾各地へ移動する際の拠点としての役割を担っていた。

## (2) 士林夜市

士林夜市は、台北市最大の夜市であり、傳統陽明戲院の周辺から大南路沿いの慈誠宮一帯までの区域と、士林市場に位置し集中管理されている美食街という2つのエリアに分かれている<sup>5</sup>。我々が訪れた2011年10月には、MRTの劍潭駅前に士林美食街が広がっていたが、現在は慈誠宮付近にある新士林市場に移転したようである。MRTの劍潭駅前に広がる士林夜市は、食べ物だけでなく、衣服や生活必需品を扱う屋台や店舗が複数出店し、若者だけでなく家族連れや多くの観光客も訪れる台湾を代表する観光資源の一つである（写真3、4参照）。

日本でも花火大会やお祭りの際に、屋台や夜店が出回るが、台湾の夜市も同様の雰囲気有しており、日常空間にある非日常を思わせる娯楽のひとつといえよう。台北市の夜市を調査した李ほか（1997）の報告によると、他の商業施設にはない夜市の魅力として、「性別、年齢に関係なく、家族クルミで楽しめる娯楽の手段であること」、「同種類の店舗が多く選択性が豊富であり、また少数の特徴的な店舗が存在し、商品選択にも幅があり、市そのものに回遊性があるなどといった夜市の形態の魅力」をあげている。まさに夜市は、台湾の市民生活から発展した観光資源であり、一大産業である。さらに、李ほか（1997）は、「夜市が立つ場所は、昼間はまた違った利用がされて」いることを指摘しており、昼間は一般道として使用されている場所に、夜は屋台が繰り出す街づくりの特徴を報告している。



写真3 MRTの劍潭駅前の様子



写真4 夜市の路地風景

<sup>5</sup> 士林夜市の概要については、臺北旅遊網（台北市）を参照。



### (3) 淡江大学

淡江大学は、「国際化」「情報化」「未来化」を三大教育理念としている（写真5、6参照）。淡江大学の淡水キャンパスは、教育・研究をともに重視する大学として『知的創造性』あふれる場であることを目指し、現在、8学部35学科、修士課程50研究科、博士課程17研究科、および16の研究センター、学生数は28000名余りを有している<sup>6</sup>。



写真5 淡江大学淡水キャンパス正門



写真6 富田先生の日本語クラスの授業風景

淡江大学の特徴ある建築物には、中国宮廷風の教室がある（写真7参照）。この教室は、1954年の創建初期に建築されており、淡水キャンパスの中で最も古い建物である。淡江大学の劉長輝教授によると、「歴史ある中国宮廷風教室こそが、淡江大学の淡江大学たる姿である。現在、これらの教室は、ほとんど授業で使われなくなっているが、大学の象徴として保存している。」とのことであった。また、教室の隣には、覺軒庭園がある（写真8参照）。この庭園は、中国の宋代の庭園を設計の思想としている。庭園には、小さな瀧があり、池には鯉が泳ぎ、亜熱帯の植物が生い茂っていた。中国宮廷風教



写真7 中国宮廷風の教室



写真8 覺軒庭園

<sup>6</sup> 淡江大学の概要については、淡江大学ホームページを参照。

室と覚軒庭園は、淡江大学の精神的象徴でもある『中学為体・西学為用』の抱負と理想を体現したものである。

淡江大学には、海事博物館もある。博物館内には、台湾の歴史に影響を及ぼしたオランダ帆船などの模型や台湾の伝統的な小型船が所狭しと展示されていた。この博物館は、淡江大学に工学部が存在することとも関連しているが、海洋資源の街として発展してきた淡水地区の教育資源としての役割も担っている（写真9参照）。その他、淡江大学内は、大学独自のテレビ局も有しており、情報教育の中核を担う施設として運営されていた。テレビ局内には、撮影スタジオが設置され、また、大学のスポーツクラブを取材したニュース映像が放映されており、活発な活動がみられた（写真10参照）。



写真9 船の形をした海事博物館



写真10 大学内のテレビ局

#### (4) 淡水地区（小白宮・淡水紅毛城）

淡江大学周辺の新北市淡水地区では、小白宮・淡水江毛城・漁人波止場を訪れ、それらの歴史や観光資源としての特徴を調査した。

高台に位置する小白宮は、リトルホワイトハウスとも呼ばれる建物で、海を望むロケーションから台湾人にとっても人気のある観光地である。かつては、淡水関税役人の官邸であったものを、現在は、建物内部を文化財として改築し、資料館として利用している。展示物には、小白宮の歴史をあらわすパネルや建物の模型などがあり、その他にも、地元の子供が作成した小白宮の未来をイメージした絵画や模型などが展示されていた。小白宮の入口には、内部を案内するスタッフが常駐していて、観光客や地元住民にも親しみやすいサービスをおこなっていた。実際に我々が訪れた際も、地元の小学生が、小白宮や高台から見える景色を絵画として描くために訪れていた。これらのことから、小白宮は、地域住民の教育活動としての役割と、淡水地区の観光資源としての両方の役割を担っていることが伺えた（写真11、12参照）。



写真11 小白宮内で絵を描く子どもたち



写真12 未来の小白宮をイメージした模型

淡水江毛城は、1629年に台湾を占領していたスペイン人によって建てられた400年近い歴史を有する歴史的建築物である。城内には、淡水江毛城の統治された歴史や関連の資料が展示されていた。城の敷地内には、城を守るために使用された大砲が展示されており、淡水江の主権をめぐる、淡水江毛城が戦火の渦に巻き込まれてきた歴史の一端を伺うことができた。また、淡水紅毛城は、淡水八景の「戍台夕日」が見える場所として、台湾国内でも人気のスポットである。本研究グループが訪れた際には、地元の学生が社会見学の一環として訪れていたり、日本人留学生が淡水紅毛城を訪れる日本人観光客を対象に、「日本人が持つ隣国台湾と韓国の観光イメージの比較調査」に関するアンケート調査を実施していた。その日本人留学生は、たまたま、名城大学の学生で淡水紅毛城の隣に位置する真理大学に留学しており、淡水紅毛城を外国人の集まる観光資源として、教育・研究活動の場に利用していた（写真13、14参照）。



写真13 淡水紅毛城内の様子



写真14 城を訪れた地元の子どもたち

#### (5) 金瓜石地区・九份地区

金瓜石地区と九份地区は、台湾鉄道の瑞芳駅を最寄り駅としている。台北駅から瑞芳



駅までは、特急で40分、瑞芳駅から九份地区まではバスで20分程度、さらに九份地区から金瓜石地区の黄金博物館まではバスで15分程度の距離に位置していることから、台北からも日帰りできる立地条件にある。

金瓜石地区の観光資源として最も開発された場所は、黄金博物館である。この黄金博物館は、清の時代に発見された金瓜石の金鉱採掘跡地を整備し、観光博物館として保存している場所である。黄金博物館の公式ホームページによると、「黄金博物館エリアは台湾国内初めての生態博物館の理念を基づいて作られたので、地域の力を合わせて、金瓜石地域にある貴重な自然環境、鉱業遺跡、特殊な景色、歴史と人文資産などを完璧に保存して、その上に新しく発展を展開していきたい。来客がその環境に入って自ら豊富な教育資源を体験してほしい。」と紹介されている。歴史的にみて日本が台湾を占領していた時代に、積極的な金山開発を推し進めたことから、園内には、当時の職員が住んでいた日本式家屋が復元展示されていた。内部の様子については、久保（2010）の報告に詳しいが、日本の統治が終わった後も、家屋の外部はそのままに、内部は中国風に改良されながら使用されていた。また、園内には、太子賓館と呼ばれる当時の皇太子殿下（のちの昭和天皇）のご来訪に合わせて建築された迎賓館も見学することができる（実際には、皇太子殿下のご来訪はかなわなかった）。太子賓館には、弓道場や石畳でできたゴルフ場が併設されていた。その他にも園内には、廃鉱山を活用した、「坑道体験」や「金取り体験」を実施していたり、最後の工場長であった三毛菊次郎宅や、1933年に日本鉱業株式会社が建立した黄金神社が残されており、日本統治時代の名残をとどめている（写真15、16参照）。

金瓜石地区には、黄金博物館以外にも、十三層遺址という選鉱場の跡地があり、かつての反映を思わせる巨大な遺跡をみることができる。また、茶壺山や黄金滝など自然の風景を楽しむことができる観光地として、台湾人も多く訪れていた。



写真15 復元された日本式家屋



写真16 太子賓館

九份地区は、金瓜石地区と同様に、かつては金の採掘で発展した街である。1971年に金鉱が閉山された後は、街は急速に衰退した（久保、2010）。しかし、1989年に公開された映画「非情城市」のロケ地として話題になり、近年は映画「千と千尋の神隠し」のモデルになった街として紹介されることが多く、台湾人だけでなく日本人観光客も多数訪れる場所である（写真17参照）。

現在の九份の街は、細い路地を挟んで商店が連なる一大観光商業地である。商店だけでなく、喫茶店や食堂も多く、人の波とともに活気に溢れた街であった。食堂の店主の中には、巧みな日本語をしゃべる高齢のおばあさんもいた。このおばあさんは、かつてこの店を訪れた日本人観光客から郵送されたという、日本語で書かれたメニュー表や日本のガイドブックで紹介されたお店の記事を使って、日本人観光客を相手に料理の紹介をしていた（写真18参照）。



写真17 九份の代表的な街並み



写真18 九份の食堂

## 5. 台湾の大都市部における観光資源としての街づくり

以上、本研究で訪れた(1)台北車站とその周辺、(2)士林夜市、(3)淡江大学、(4)淡水地区(小白宮・淡水紅毛城)、(5)金瓜石地区・九份地区の街づくりの特徴について概説してきた。つづいて、地域活性化の視点から、これら大都市部とその近郊における観光資源の特徴をまとめると次の四つの特徴をあげることができる。

第一に、観光地として整備された施設が、教育活動の場として活用されていることである。淡水地区の小白宮では、地元の小学生が風景画を描くために訪れ、施設内には、子どもたちの絵画や模型作品が展示されていた。淡水紅毛城は、平日にも関わらず、地元の中学生が、教員とともに訪れ、施設見学をおこなっていたり、日本人留学生が研究調査の活動をおこなう場所としての役割を担っていた。淡江大学では、中国宮廷風教室と覺軒庭園が、中華文化を理解する教育資源として保存され、海事博物館は、海洋資源の街として発展してきた淡水地区の教育資源としての役割も担っていた。また、金瓜石地区では、廢鉱山を活用した、「坑道体験」や「金取り体験」を実施しており、見るだ

けの博物館ではない観光資源の活用をおこなっていた。これらの施設は、単なる観光地としての役割だけでなく、地元の子どもや大人が学ぶ教育資源としての機能を果たしていた。

第二に、台湾人の日常生活が、国際的な観光資源として活用され、地域活性化の役割を担っていることである。士林夜市に代表される夜市は、屋台や夜店が賑わうことで、昼間とは違った街の風景をつくり、娯楽としての観光資源となっていた。九份地区では、かつての金鉱で栄えた街並みを生かし、一大商業地に転換することで、地域の活性化を生み出していた。これら台湾人の日常生活が観光地されたことは、外国人にとって自国では体験できない刺激として受け入れられ、地元台湾人と外国人との交流を促進する役割を担っていた。

第三に、流行や時代の流れをうまく取り込んでいることである。特に九份地区は、映画「非情城市」をきっかけとして、街が復興のチャンスをつかみ、映画「千と千尋の神隠し」の舞台になったと宣伝されることで、日本人をはじめとした外国人観光客が訪れることになった。また、本報告では詳しく触れなかったが、101タワーや淡水漁人波止場も地元のテレビで紹介される人気スポットとして、地域活性化の役割を担っていた。

第四に、日本統治時代の施設や、一度は廃れた地域の資源を積極的に活用していることである。金瓜石地区や九份地区は、かつての日本式家屋や鉱山跡地を復元し、観光地として活用していた。淡水紅毛城は、400年近い歴史の中で、スペイン、オランダ、鄭氏、清、イギリス、日本などの統治を受けてきた場所として、台湾島の歴史を学ぶ観光資源として、地域活性化の役割を担っていた。

これら四つの特徴を2010度の台南縣での調査（小室ほか、2011）と比較してみると、第三と第四の特徴は、台南縣の地域活性化の取り組みと共通する視点であることがわかる。しかし、第一と第二の特徴は、中規模都市の台南縣ではみられなかった特徴である。なぜ、第一と第二の特徴は、大都市部とその近郊でみられ、地方の中規模都市ではみられなかったのだろうか。それを知る手がかりとして、教育に関わる側面と国際交流に関わる側面から、両地域の比較検討をおこなう。

まず、教育に関わる側面について、台南縣の社区营造では、社区住民が地域の学生や子どもたちと協力して、限られた資源を活用しながら街づくりを進めることで、その街づくりの過程自体を学びの場として活用していた。例えば、曲溪社区の自然学校の活動や、龍山社区の牡蠣の貝殻を使った公園づくり、土溝社区の「土溝最後一頭水牛」の取り組みである。場合によっては、大学から専門家や学生を招き、知識や技術を活用しながら、街づくりを進め、地域活性化に取り組んだ。

これに対し、大都市部の観光施設では、公園や博物館として整備された観光地そのも

のが、地元の子どもや大人が学ぶ教育資源としての機能を果たしていた。すでに完成された都市部の公園や博物館は、例えば、小白宮のように地域の子もたちの作品を展示することや、黄金博物館のように体験教室を開設することで、地域住民の学びの場としての役割を担っていた。つまり、教育に関わる側面として、社区营造では街づくりそのもののプロセスが学びの場であり、大都市部の観光施設では完成された資源から学びを得るといふ、教育資源の特徴の違いを指摘することができる。

次いで、国際交流の場としての側面について、台南縣の社区营造では、例えば土溝社區の「水水的夢」の取り組みのように、日本の源平川を訪れたり、日本の専門家を招いて交流する取り組みがあった。この他にも、曲溪社區の世界的に珍しい悪地地形を観光資源として活用しようと考えたり、總爺文化区のように日本統治時代の日本企業の跡地を公園化して観光資源として整備した取り組みがあった。流行や時代の流れを取り込んだ取り組みとしては、菁寮社區のように、台湾国内を中心にヒットし一時的なブームとなった映画「無米樂」の舞台として、ブランド米の生産・販売に携わるところもあった。

しかしながら、台南縣における多くの社区营造では、地域住民を主体とした街づくりにとどまっており、台南縣自体の国際的な知名度の低さと立地条件の不利が重なって、日常生活の中での国際交流のチャンスは少ない（この意味において、土溝社區の「土溝最後一頭水牛」や「水水的夢」の取り組みは、例外的といえる）。また、台南縣にも大きな夜市は存在したものの、立地条件の不利が外国人観光客の足を遠のかせ、地元民の日常生活の場となっていた。

一方、大都市部やその近郊の士林夜市や九份地区などの観光地では、時代の流れを取り込んだブームを活かして、その立地条件の良さも相俟って、台湾人の日常生活に密着した街づくりが、国際的な観光地として存在感を高めていた。さらに、台北市や新北市の大都市部での街づくりには、その国のシンボルやその地域の代表となる施設が、地域活性化の役割を担っており、例えば、101タワー、国立故宮博物館は、台湾が世界に誇る観光資源として、淡水漁人波止場は地元ドラマやテレビ番組でも紹介される代表的な観光資源としての役割を担っていた。

国際交流の側面から、大都市部と地方の中規模都市の比較をおこなうと、街づくりに関しては、大都市部では日常生活そのものが国際交流の資源になるのに対し、地方の中規模都市では、街づくりの取り組みに国際交流を促進する（外国人を受け入れる）工夫が必要であるといえる。

このような大都市と地方都市の国際交流の格差は、日本でも顕著ではある。森重(2010)によると、北海道の都市部ではない3地域の観光まちづくりの共通した特徴に「自治体やNPO、企業、住民などの各主体が協働して、地域外関係者が地域づくりにか



かわるしくみづくり」があると指摘されている。台南縣の社区营造の中でも土溝社区の「土溝最後一頭水牛」から「水水的夢」へと発展した取り組みは、政府と住民と地元大学が協働して街づくりを実施し、日本の研究者との交流を含めて地域活性化に取り組んだ事例であり、その特徴は、森重の指摘と一致する。この取り組みが、台南縣でも成功した社区营造として評価されるのは、まさに、街づくりの過程に地域住民だけでなく、地域外の人々を巻き込み、地域活性化を促したことに尽きるのではないだろうか。地方の中規模都市の街づくりそのものが学びのプロセスであることは、先に述べたが、街づくりに地域外関係者を巻き込む仕組みを作ることは、地方の中規模都市における国際交流を生み出す工夫にもなり、地域住民にとっては、地域活性化を通じた学びと国際交流へと意図せざる広がりをもたせざるきっかけになるといえる。

## 6. まとめ

本研究は、台湾の中で最も発展している台北市や新北市の街づくりを調査することで、中規模の地方都市である台南縣での社区营造との比較をおこない、街づくりの手法が、地域活性化に及ぼす役割の違いを明確に示すことを目的とした。

その結果、台北市や新北市の大都市部の街づくりには、地域活性化の視点から、次の四つの特徴があることがわかった。第一に、観光地として整備された施設が、教育活動の場として活用されていることである。第二に、台湾人の日常生活が、国際的な観光資源として活用され、地域活性化の役割を担っていることである。第三に、流行や時代の流れをうまく取り込んでいることである。第四に、日本統治時代の施設や、一度は廃れた地域の資源を積極的に活用していることである。

これら四つの特徴の中でも、第一と第二の特徴は、中規模地方都市の台南縣における社区营造ではみられなかったことから、それぞれの特徴に関して、教育に関わる側面と国際交流に関わる側面から比較検討した結果、次のことを指摘することができた。

教育に関する側面については、社区营造では街づくりそのもののプロセスが学びの場であり、大都市部の観光施設では完成された資源から学びを得るという、教育資源の特徴に違いがある。

国際交流に関する側面については、大都市部では日常生活そのものが国際交流の資源になるのに対し、地方の中規模都市では、街づくりの取り組みに国際交流を促進する（外国人を受け入れる）工夫が必要である。

街づくりに地域外関係者を巻き込む仕組みを作ることは、地方の中規模都市における国際交流を生み出す工夫にもなり、地域住民にとっては、地域活性化を通じた学びと国際交流へと意図せざる広がりをもたせざるきっかけになっていた。

## 【参考文献】

- 小室達章、後藤昌人、岩崎公弥子、中田平（2010）「産学連携による地域活性化プロジェクト」、『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』、第14号、19-32.
- 小室達章、後藤昌人、高橋和文、岩崎公弥子、時岡新、中田平（2011、a）「台湾の社区营造における地域活性化の特質」、『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』、第15号、19-32.
- 小室達章、後藤昌人、岩崎公弥子、中田平、高橋和文、時岡新（2011、b）「産学連携・住民参加による地域活性化：国内外のヒアリング調査から」、『金城学院大学人文・社会研究所報』、第16号、47-57.
- 久保知里（2010）「観光地化された台湾」、『福岡大学研究部論集A9』(8)、22-25.
- 森重昌之（2010）「観光まちづくりにおける地域外関係者の受け入れのしくみとその特徴」、『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』(6)、105-116.
- 李東毓、戸沼幸一（1997）「台北市の夜市に関する研究 その1 都市部における夜市の分布状況」、『社団法人日本建築学会、学術講演梗概集. F-1、都市計画、建築経済・住宅問題』、557-558.
- 高橋和文、小室達章、後藤昌人、岩崎公弥子、時岡新、中田平（2011）「台南県後壁郷土溝村における社区营造の取り組み－健康的な社会環境づくりの視点から－」、『金城学院大学論集自然科学系紀要』、第15号、19-32.

## 参考URL

- 淡江大学：<http://foreign.tku.edu.tw/lang/j/about/campus-tamsui.asp>
- 新北市観光旅遊網：[http://tour.tpc.gov.tw/tourism\\_jp/index.do](http://tour.tpc.gov.tw/tourism_jp/index.do)
- 黄金博物園區：<http://www.gep-jp.tpc.gov.tw/jcontent/about/about.asp>
- 臺北旅遊網：<http://taipeitravel.net/jp/>